

〈シリーズ〉

わが校の 取り組み・ 私の工夫

第15回

—進学実績の向上 編—

このシリーズは、主に高等学校の取り組みや、個々の先生方の実践事例を紹介する。第15回のテーマは「進学実績の向上」について。実績のある小論文指導を生徒の現状に合わせて刷新し、改めて進路指導の核とすべく再構築に取り組む岩手県立盛岡北高等学校と、クラス数の減少が続く中、小規模校の特性を生かしたきめ細かい指導でここ数年進学実績を伸ばしてきた岡山県立井原高等学校の2校を紹介する。

Contents

- ◇学校事例 岩手県立盛岡北高等学校 P36
- 岡山県立井原高等学校 P39

学校事例

岩手県立盛岡北高等学校



3年間の体系的な小論文指導を核に 全教員が生徒一人ひとりを後押し

盛岡市の北部、背後に岩手富士を望む岩手郡滝沢村に位置する盛岡北高等学校は、創立37年と歴史の浅い高校ながら毎年国公立大学へ百数十名の合格者を送り出し、推薦入試に強い高校、地元の大学に強い高校として地域からの評価も定着している。2009年4月からは民間企業出身の校長を迎え、魅力ある高校を目指して学校運営の見直しと改革にも着手している。

昨今の同校の進学実績向上への取り組みを進路主導主事の千葉貢先生（英語）、進路指導課の押切真也先生（小論文委員長・地歴）、渡辺修二先生（理科）、昨年度の3学年主任の村上治昭先生（国語）に伺った。

推薦入試出願者は、生徒の希望に基づき、志願理由書を参考に校内で選抜し決定する。生徒1人に対して、1・2年の教員が中心となって小論文指導担当1名、面接指導担当は3名が割り当てられる。希望する学部系統に沿って、各教科の教員が受け持つ。

小論文対策は過去問を調べ、傾向をつかむところから始まる。「昨年は、看護、保健など医療分野への進学を望む生徒を受け持ちました。過去問を参考に、資料を読み込んだの小論文など、類題を合わせて1人10数本は書かせました」（押切先生）。「自分の意見を表現するまでに10回以上書き直しを必要とする生徒もいますが、皆よくついてきています。ほとんどの生徒が延べ15本以上、多い生徒では30本書く生徒もいます」（渡辺先生）。同校では、小論文指導を進学実績向上の核として、独自のテキストも作成している（詳細は後述）。

「面接は回数をできるだけ多くという考えから、正・副担任も含めて最低でも10回は指導しています。校長へ依頼する者や試験前日まで指導を申し込んでくる熱心な

進学実績を支える推薦入試 正・副担任、小論文担当、面接担当で指導

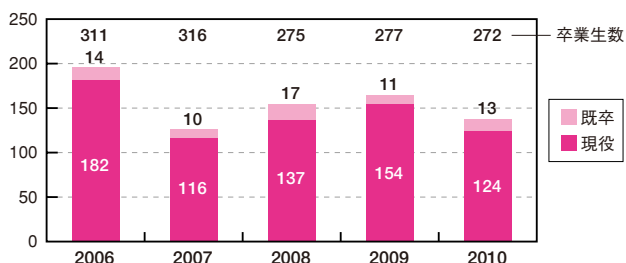
最初に、同校の過去5年間の国公立大合格者数の推移を見てみよう<図表1>。2008年3月卒業生（2008年度入試）は、同校の募集定員が320名から280名に削減された年の生徒であるが、合格者数は伸びており、それ以降も実績を維持している。

2010年度入試での、入試区分ごとの合格状況<図表2>を見ると、推薦入試による合格者が多いことに気づく。毎年合格者全体の25%前後を占めているという。



千葉貢先生 押切真也先生 渡辺修二先生 村上治昭先生

<図表1> 国公立大 合格者数 5カ年推移



<図表2>

2010年度入試 入試区分別国公立大合格状況(現役生)

	前期	中期	後期	AO	推薦	合計
国立大	39	—	14	0	19	72
岩手大(内数)	18	—	5	0	11	34
公立大	30	8	5	2	7	52
岩手県立大(内数)	16	—	2	1	3	22
国公立大合計	69	8	19	2	26	124

生徒が多いですね。より多くの教員から指導を受けた生徒ほど合格率は高くなります」(千葉先生)

クラス担任は、志望理由書の指導が中心となる。「校内選抜の資料となった志望理由書では大学に提出するには不十分です。推薦が決まった生徒については、1カ月余りの間、何度でも書き直させ完成度を高めていきます」(村上先生)

後期日程も教員総出で指導 最後まで粘る意識を醸成

国公立大合格実績を伸ばしているもう一つの要因に、後期日程での合格者が多い点が挙げられる。「国公立大受験は、推薦入試、一般入試の前・中・後期日程と多数チャンスがあること、だから最後まであきらめないこと、この2点を日頃から何度も繰り返して説いてきました」(村上先生)

同校では、後期日程を受験する生徒を対象として、卒業式後3月11日まで学習会を行っている。県立高校入試で生徒が校内に入れないため、外部の施設を借り、3日間9時から19時まで自習を中心とした仕上げの学習会である。この時は、高校入試にかかわらない教員が総出で自習監督や面接指導官を担当する。夕方には、高校入試で校内にいた教員も会場に駆けつけ、指導に加わる。3年の担任は、受け持つ生徒ごとに翌日の課題を作成する。このように全教員が後期日程対策に尽力する姿勢と指導が生徒にも伝播し、昨年度は想定の倍の生徒が、学習会に参加したという。最後まであきらめない生徒が後期日程に臨み、毎年25名前後の合格者を出している。「本校に入学してくる生徒は、中学時代にクラスで10位前後の

成績だった生徒たちです。この子たちは、生活指導の問題もなく、ある程度自分で勉強できますから、中学時代は一番手のかからない層。言いかえれば、手をかければ大きく飛躍する層でもあるのです」(渡辺先生)

全国から視察に訪れる「唸らせる小論文」指導

10年ほど前、国公立大における推薦入試の増加に合わせて、同校では他校に先駆け、小論文研究と指導に着手した。同校独自のテキスト『唸らせる小論文』は、入門編、養成編、完成編の3冊構成となっており、1年次から段階を踏んでプログラムを作成している。県内だけでなく全国的にも高い評価を受け、これまでに数多くの視察を受け入れてきた。しかし、現在では、推薦入試に照準を合わせた指導から、生徒の学力、志向の変化に合わせて、考える力や生きる力を育む存在へと位置づけが変化しているという。

1999年に初版を作成してから今日まで、題材の差し替えなど部分的な改訂を繰り返した『唸らせる小論文』だが、昨年度は入門編、養成編の大幅な見直しを行った。「これまでのプログラムと、生徒の実態との間にギャップを感じるようになりました。そこで、母体となる小論文委員会の役割を明文化し、各学年2名からなる小論文委員が中心となって『唸らせる小論文』を改訂するに至りました」(千葉先生)。「1年次の入門編は、以前のテキストでは『まず書いてみよう』から始まっており、ある程度文章を書けることが前提になっていました。今回は、生徒の状況に合わせて、小論文とは何か、小論文を書くために必要なことなど、小論文を理解する上で必要な知識を導入部に配しました」(押切先生)

改訂のポイントとなったのは、読解力の強化だ。1年次の入門編は、問題点の把握→資料の読解→要約→自分

<図表3> 「唸らせる小論文」入門編 目次

1	盛岡北高校小論文学習の理念	14	小論文講演会①記録・感想
2	進路指導計画	15	要約しながら読んでみよう
3	なぜ小論文が必要なのか?	16	要約手順
4	小論文とは何か?	17	要約練習問題①
5	小論文を使う入試	18	夏休み小論文課題①
6	小論文試験の種類	19	夏休み小論文課題②
7	どんな問題が出題されるのか	20	要約練習問題②
8	問題を捉える目を養う	21	課題文型小論文に挑戦しよう①
9	新聞を読もう	22	課題文型小論文に挑戦しよう②
10	新聞を疑え!	23	データ型小論文に挑戦しよう①
11	原稿用紙の使い方	24	冬休み小論文課題
12	テーマ型小論文に挑戦しよう①	25	データ型小論文に挑戦しよう②
13	テーマ型小論文に挑戦しよう②	26	小論文講演会②記録・感想

の意見をまとめるという流れで構成されている<図表3>。「問題を捉える目を養う」は、今回新たに追加された項目で、普天間基地問題を例に、①問題点を整理し、②その原因・背景を考え、③複数の視点で捉えるという3つのステップが提示されている。その上で、不法滞在者の子どもの強制退去問題を扱った新聞記事を題材に、3つのステップで問題点を把握し、自分の意見を述べるワークにつなげている。読解力の低下は、国語や小論文だけでなく、多くの教科でも問題視されている。「与えられた情報を生徒が評価できてこそ『理解した』と言えます。読解し、考える。小論文の学習は他の教科にもつながっていくはずです」(千葉先生)

また、指導計画は改めて進路指導との関連性を強くした。2年次修了時点で「志願理由書」を書くことを到達目標に据えたのだ。そのために「書く」「読む」「知識・情報」をどの段階でどのレベルまで身につけさせるのか到達度を定め、そこから逆算して必要な力を習得するためのプログラムを積み上げていった<図表4>。

2年次で使う養成編では、大学入試で出題されたテーマ、読んでおきたい本の紹介など入試に直結する情報が盛り込まれている。「いずれも題材は易しく、取り組みやすいものになりましたが、到達目標が明確なので要求水準はむしろ高くなっています」(渡辺先生)

完成編では、今まで学んできたことをベースにさらに実践的な内容となっており、小論文の基礎を学ぼう(入門編)→斬新な視点で論理的に書こう(養成編)→正しい知識の上にオリジナリティーあふれる主張をしよう(完成編)と道筋を立てて完結させている。

2年次修了時に志願理由書を書かせるのは、到達レベルの確認はもちろんのこと、3年次に向けての進路指導の一環でもある。「推薦入試を志望する生徒にとっては本番さながらの前哨戦を経験でき、一般入試を受験する生徒にとっては『なぜ、その大学を目指して頑張ってきたか』を確認する材料となり、最後まで頑張り続ける原動力となります」(千葉先生)

**難関大を目指す生徒を増やし
学年をリードできる環境づくりへ**

「岩手大、岩手県立大を目指すなら盛岡北高校へ、という評価を得ているのは確かです。しかし、生徒も教員も、そこに甘んじてしまうのが本校の問題点でしょう」と千葉

<図表4>小論文指導計画(2年生)

活動	段階など	4~7月	8月	1~3月		
小論文	書く	到達段階	基本的小論文が書ける	基本が書ける	基本的小論文が書ける	
		イベント	大学模擬講義①	読書	読書	学問研究のまとめ 小論文講演会②
		テキスト	添削指導(担任団)	添削指導(担任団)	添削指導(担任団)	
	読む	到達段階	唸らせる小論文	唸らせる	唸らせる小論文	
		イベント	読解力を磨く① グラフ・資料の分析	読解 グラフ 読書 (新書 読ませる)	読解力を磨く⑤ グラフ・資料の分析	
		テキスト				小論文講演会②
	知識 情報	到達段階	唸らせる小論文	新書	唸らせる小論文	
		イベント	新聞を読む 日本の論点など		新聞を読む 日本の論点など	
		テキスト	朝読書など(朝学習) 新聞・日本の論点・ プリント		朝読書など(朝学習) 新聞・日本の論点・ プリント	
	志願理由書	到達段階	学問研究	オープン (東北大)	学問研究	志願理由書を書く
	学校行事等	イベント	大学模擬講義①	オープン (東北大)	オープン (東北大)	フォーラム・セミナー
		テキスト	進路指導資料	大学	大学	志望大学資料

先生は課題を語る。生徒や保護者からのニーズの高い地元
の大学への合格者を増やすためにも、東北大などの難関大
を目指せる生徒を増やし、その生徒たちがクラスや学年を
リードするという考えだ。「今回、小論文委員会を組織し、
『唸らせる小論文』を刷新したことで、この小論文指導を
本校の指導のコアにしようという機運が高まっています。
また、民間人校長を迎えて、いろいろな取り組みについて
も、前例踏襲ではなくゼロベースで考えるという風土も浸
透してきました。今後の生き残りのためにも、これから数
年が勝負だと感じています」(千葉先生)

岩手県立盛岡北高等学校

◇所在地：岩手県岩手郡滝沢村滝沢字牧野林298-1

◇設立：1974年

◇学級編成：[全日制] 普通科 1学年定員240人

◇生徒数：770名(2010年4月7日現在)

◇特色

教育理念は、夏目漱石の言葉から引用した「師弟和塾^{ししていかりく}」。生徒と教師が共に学び、共に切磋琢磨する精神を大切にしている。また、部活動や委員会活動も活発で、部活加入率は95%を数える。体操部をはじめとして東北大会やインターハイ、全国高校文化祭へ出場している部もある。本年度初めて、新1年生を対象に入学式翌日から1泊2日で、親睦と友達作りを目的とした宿泊研修も導入するなど、新たな試みに積極的に取り組んでいる。

◇卒業生の進路：2010年3月卒業生

- ・卒業生272名/大学・短大等進学者217名
専門学校等進学者18名 就職ほか2名
- ・合格者内訳(延数)/国公立大124名 私立大194名 短大48名

岡山県立井原高等学校



小規模校の特性を生かす 学校全体としての指導体制づくり

岡山県の南西部、広島県と境を接する井原市に位置する岡山県立井原高等学校は、100年以上にわたる歴史をもつ。2006年には、近隣の精研高等学校と統合し、新たなスタートを切った。地域に根差した普通科高校としての役割を果たすため、3年前から進路指導体制作りと指導力の向上に注力し、その成果が表れてきている。

近年、着々と国公立大学への合格者数を増やしてきた同校の取り組みを普通科進路課課長の竹中誠先生と、課長補佐の定藤芳樹先生に伺った。



竹中誠先生

2010年度入試では、卒業生153名（普通科）のうち100名（65.4%）が国公立大を志望し、そのうち62名が合格。内訳は、岡山大13名（内AO・推薦入試合格者5名）、広島大4名（同3名）、香川大8名（同5名）、神戸大に1名、その他の国立大に14名、公立大に22名。また、AO・推薦入試での合格率は44%、一般入試での合格率は43%だった。

学年完結型の進路指導から 学校全体としての進路指導へ

数年前まで、同校には学校全体としての一貫した進路指導方針はなく、受験指導は学年主導で進められていた。そのため、教員個人の経験や勘に頼ることが多く、学年によって指導にバラつきが生じるという課題もあった。

そこで、3年前から、学校全体としての進路指導システムを作り上げることに着手した。学年ごとに完結して

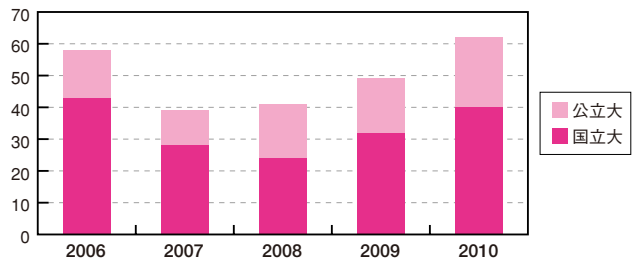
生徒数減少の中 地元の国立大を中心に進学実績は好調

この10年で、同校を取り巻く環境は大きく変化している。まずは1999年の学区再編に伴い、井原市内の中学生在近隣の高校へ流出する現象が始まった。2000年には、1学年5クラスから4クラスに縮小。2006年には精研高等学校（園芸科、家政科）と統合した。その後も、少子化の影響は避けられず、今年度の入学生から、普通科は3クラス（120名）となった。

こうした状況に、学校存続への危機感さえ生まれているが、新入生アンケートによれば国公立大への進学を望む生徒が56%、保護者は67%と、同校への期待は大きい。「国公立大合格を目指せる学校が身近にあれば、時間とお金をかけてわざわざ遠方の高校に通う必要はないでしょう。市内唯一の県立高校である本校が担う役割は大きいはず。これが本校の指導の原動力になっています」と、竹中先生は力説する。

ここで、同校の最近の合格実績を見てみよう<図表1>。国立大合格者数は、2008年度入試では24名（岡山大、広島大、香川大の合計が3名）、2009年度は32名（同12名）、2010年度は40名（同25名）と、地元である中四国地方の国立大合格者数が徐々に増加し、全体の進学実績を支えている。

<図表1> 国公立大学合格者数推移



年度	国立大	公立大	岡山大	広島大	香川大
2006	43	15	6	2	3
2007	28	11	3	1	4
2008	24	17	2	1	0
2009	32	17	8	1	3
2010	40	22	13	4	8

(入試区分別)

年度	AO	推薦 (センター無)	推薦 (センター有)	前期	中期	後期	合計
2006	0	5	5	38	2	8	58
2007	0	5	2	25	1	6	39
2008	1	7	6	20	4	3	41
2009	2	4	8	25	3	7	49
2010	7	11	6	28	3	7	62

いたノウハウを進路課が蓄積し、進路行事を整理し取りまとめる。1つひとつの取り組みを3年間一貫して効率的に進めるよう再編成した。学年団の指導を最大限生かすためにも、「学校一丸となって目指すもの、やるべきこと」を明確にしたのだ。

現在では、年度初めに進路課が基本方針<図表2>を策定し、職員会議を通じて具体的な活動目標と数値目標

<図表2> 2010年度(平成22年度)進路課基本方針

1. 自己実現のための主体的な学習態度の育成

- (1) 個に応じたきめ細かな指導
 - ・進路意識や進路選択の多様化に応じた指導
 - ・難関校を目指せる生徒の育成
 - ・下位層に達成感を味わわせる工夫
 - ・生徒の状況に合わせた課題の設定
 - 1・2年 全員共通のものを与えるが、様子を見ながら習熟程度に応じたものを選択させるのが望ましい。
 - 学習意欲の高い生徒には α (朝、放課後、特別課題など)を与える。
 - 3年 夏休み前までは1・2年と同様とする。夏休みからは各自の進路希望に応じたものを選択させる。
 - ・3年間を見通した進路指導・納得のいく進路選択と進路指導
- (2) 面接指導の充実
 - ・進路意識の高揚
 - ・進路選択についての相談、助言
 - ・自己実現へ向けての叱咤激励
- (3) 計画立案遂行能力の育成
 - ・学習実態調査の活用
 - ・長期休業中の学習計画の活用
- (4) 情報発信
 - ・学年、行事など状況に合わせた情報発信
 - ・生徒、保護者、教員、地域など対象に応じた情報発信

2. キャリア教育の推進

- (1) 自己分析能力の育成
 - ・「現在の自分」を客観的に把握し、「将来の自分」を描かせる。
 - ・自己を見つめる
 - ・人生設計のはたらきかけ(how to live)
- (2) 将来設計能力の育成
 - ・自ら考え、情報を収集し、さらにそれを活用させまとめていく。
 - 大学訪問、出張講義、職業理解のためのガイダンス、企業訪問、進路研究、職業研究、課題研究
 - ・生の声に触れる
 - 教育実習生と語る会、卒業生のお話を聞く会

3. 確かな教科力・進路指導力の確立

- (1) 各教科の特性を生かした魅力ある力のつく授業の実践
- (2) 進路課と学年との連携
- (3) 学年担当者間および教科内での授業参観や話し合い
 - ・多様化への対応と教員の研鑽
 - ・確固たる指導方法の確立
 - ・人から学ぶ、人から取り入れる。

を提示。半年ごとに進路行事を検討して、教員向けカレンダーを作成している。さらに、活動の核となる進路キャップを各学年に置いて、週1回情報交換の時間を設けている。こうした体制の下で、長期休暇中の補習や3年生対象の8限補習、さらには全学年対象のさわやかタイム(朝10分間の読書や小テスト)、学習合宿(夏季)、土曜活用(3年生は年8回、1・2年生は年10回実施)などの取り組みを再スタートさせた。

生徒と教員の距離の近さを生かし 一人の生徒を複数の教員の目で見ると

小規模校の特長としては、生徒と教員の距離が極めて近い点が挙げられる。教員は3年間持ち上がるので、3年間のうちに、担任としてかわる生徒の割合が高い。また、学年に所属する教員も他の学年の授業を受け持つことも多く、資料やデータだけではなく、日頃の交流の中から生徒の気質や進路希望などを把握しやすい。

3学年を通じて実施される進路検討会に加えて、昨年度から進路課が主導することとなった3年生6月の推薦会議は、この利点を生かした会議だ。出席者は、3年年主任と各クラスの正担任、そして進路課。推薦会議の発案者となった定藤先生は、その意図を次のように語る。

「AO入試・推薦入試対策は、準備の時期も早いうえ、教員にも生徒にも大きな負担がかかります。ここで指導を担当個人の判断に頼っても、教員は自分の教科については生徒の力を判断できますが、総合的に生徒の力を見極めるのは困難です。そこで、生徒の気質と能力をよく知る複数の教員が、客観的に一人ひとりを検証していく場が必要であると考えました。また、AO入試、センター試験が不要の推薦入試、センター試験を課す推薦入試と、指導時期を分散させることによって、担任の負担が集中しないようにというねらいもあります」

進路検討会議・推薦会議では、評定、模試成績、校内実力テストの結果、志望調査書などの資料・データを整理し、かつ生徒の特性を考慮しながら検討が行われる。会議での判断を踏まえて担任が進路指導にあたるので、学年としての方向性も揃う。

また、一貫したメッセージが生徒に浸透しやすいという利点もある。2010年度入試において合格者数が増加した



定藤芳樹先生

要因を、定藤先生は次のように語る。「1年次から英語力強化を学年の方針として指導してきました。学年主任は3年間ことあるごとに英語の必要性を説き続けてきました。朝の10分間（さわやかタイム）で週1回、一斉に英語の小テストを実施していますが、その結果について細かく生徒に声がけしました。補習も、特に英語の比重を高めました。このような指導を通じて、生徒の中で英語への関心が高まり、『英語はしっかりとやらなければ』という意識が育ったようです」

生徒の変化を敏感に察知し 対話の時間を頻繁に作る

こうした活動の背景には、全教員が日常的に生徒に目を配る姿勢がある。同校では放課後になると、生徒を呼び出す校内放送が頻繁に流れる。「いつもは活発に話しかけてくる生徒が無口になる」「小テストの結果が急に悪くなった」など、毎日の出来事から生徒の変化を察知し、教員が放課後や昼休みを利用して生徒とコミュニケーションをとっているのだ。さらに、学年や担任の判断で、実力テスト実施後など必要に応じて、年3～4回、多い生徒では6回程度の面談が行われる。「小テストであっても、教員は最後の一人まで追試を行い、きめ細かく指導しています。それらが、ますます生徒との距離を近づけ、本校の強みとなっています」（竹中先生）。職員室前の廊下には蛍光灯付きの机が用意されており、取材時にも、質問に来た生徒に対して、掲示板を黒板代わりに、教員が解説する姿が見られた<写真>。



職員室前の長机

難関大対策、指導力向上は 外部との連携も視野に

小規模であることは、教員の指導力向上という点においても課題があると竹中先生は指摘する。「本校では、岡山大・広島大・香川大への進学指導については、それぞれの教科においてノウハウはすでに蓄積されています。さらに難関大を目指すためには、やはり教員の指導

力向上が欠かせません。しかし、学年に、その教科の教員が一人という場合もあり、他校で取り組んでいるような入試問題研究や、先輩教員から若手教員への教科指導力の継承もままなりません」

そのため、校内の資源には限りがあるという現実も受け入れ、外部の力の活用も試みている。予備校での研修などに多くの教員が積極的に参加しているほか、市内にある学習塾との連携にも取り組み始めた。年に数度来校してもらい、管理職と教務課長、進路課長が、指導方針、生徒の状況について情報を交換。さらに、今後は教科主任も参加して、より具体的な教科指導の話まで落とし込むことも視野に入れている。

同校では、定員120名となった今年度の1年生が大学を受験する2013年度入試での国公立大現役合格率の目標を50%に設定している。「現在の合格者実数を維持できれば、合格率50%は決して不可能ではありません。しかし、生徒数が少ないため生徒同士が切磋琢磨する環境が作りにくいという悩みがあります。そこで、校外模試や講習などには、積極的に参加するように勧めています。さらに、同じような環境にある他校に呼びかけ、まずは難関大を目指す生徒から合同合宿を実施するなど、新たな方法も模索しています。実績が伸びてきている今だからこそ、将来に向けて布石を打っていきたいと考えています」（竹中先生）

岡山県立井原高等学校

◇所在地：【普通科】〒715-0019 岡山県井原市井原町1802
【園芸科・家政科】〒715-0019 岡山県井原市井原町1875

◇沿革：1902年 井原女子尋常高等小学校に補習科として付設
1948年 学制改革により岡山県立井原高等学校へ
2006年 精研高等学校と統合

◇学級編成：[全日制] 普通科：1学年定員120人（2・3年生は160人）園芸科・家政科：1学年定員各40人

◇生徒数：671名（普通科：433名 園芸科：120名 家政科：118名）（2010年5月1日現在）

◇特色

校訓は、『誠実 創造 自立』。普通科は、単位制で、北校地を拠点とする。園芸科、家政科は近隣の南校地で学んでいる。最近では両校地間の交流も盛んになってきた。

◇卒業生の進路：2010年3月卒業生（普通科）

- ・卒業生153名／大学・短大進学者125名
専門学校等進学者16名 就職ほか12名
- ・合格者内訳（延数）／国公立大62名
私立大144名 短大11名